文学の中の被差別部落像

戦後篇

梅沢利彦
平野栄久
山岸嵩

梅沢利彦（うめざわ としひこ）

1935年　東京都に生まれる
差別とたたかう文化会議
東京都葛飾区高砂5—19—9

平野栄久（ひらの ひでひさ）

1935年　東京都に生まれる
新日本文学会
東京都杉並区久我山4—11—9

山岸　嵩（やまぎし たかし）

1935年　長野県に生まれる
新日本文学会
東京都目黒区緑ケ丘1—7—23

文学の中の被差別部落像
—戦後篇—　　**定価 2500円**

1982年6月25日　初版第1刷発行

著　者 ©　梅沢利彦
平野栄久
山岸　嵩
印刷所　相良製版印刷
製本所　文勇堂製本㈱
装　丁　山岸田鶴子

発行所　株式会社 明石書店
東京都千代田区神田神保町1-56
電話　03（295）6846
振替　東京　0—24505
郵便番号　101

落丁・乱丁本はお取替えいたします。　0095—0019—0182

文学の中の被差別部落像

戦後篇—

序にかえて—初めて部落問題に接する方へ

—安政六（一八五九）年、江戸山谷の真崎稲荷の縁日で、参詣に来た弾左衛門配下のエタ一人が町方の若者たちによってたたき殺された。エタが立ち入ると稲荷境内がけがれるというのである。弾左衛門は北町奉行に下手人の処刑を求めた。しかし奉行池田播磨守は、穢多身分は平人の七分の一の価値しかないから、穢多が七人殺されたのでなければ、町方の者一人たりとも死罪にするわけにはいかない、とうそぶいた。—

生命の値段で差別を表現した江戸末期の部落差別のえげつなさを物語るエピソードとして部落通史の本には必ずといってよいほど紹介されている。

もう一例挙げる。

部落民への差別は死後の世界にまでまつわりついていることは、以前から知られている。「畜男」「畜女」などといった差別戒名が墓石や位牌に残されているのである。「卜女」というのもある。「卜」は「下」の「一」がないもの、つまり「下の下」を表わすとも言い、「歩の異字で十分の一」、つまり「〃一般民〃の十分の一の仏性」しか認めない意味だとも言う。仏教による被差別部落民の人間性剥奪である。親鸞の屠（と）（生きものを殺す漁師）沽（こ）（行商人）の下類は「みな、いし、かわら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つぶてのごとくわれらなり」（『唯心鈔文意』）という絶対平等観で代表される人間救済の鎌倉仏教が、差別護持の封建教学に堕したのである。

なるほど明治四（一八七一）年には、いわゆる賤民解放令（太政官布告）が出され、第二次大戦後の新憲法は社会的身分等による差別を禁止している。

しかし、それらはあくまで法的な建前であって、戦前は〝新平民〟なる蔑称による差別が横行していたことは、島崎藤村が『破戒』に描いたとおりである。差別の実態は放置され、逆に納税・兵役の義務が課されて、一層窮乏を深めていったのが戦前の被差別部落の実情である。

現在はどうか。手許に一枚の資料がある。一九七五（昭和五十）年発行の『同和地区地名総覧』の「序」にあたる部分のコピーだ。被差別部落の所在地名を記した『総覧』を、職員採用や結婚の身許調査に利用するようにとつぎのようにうたっている。「調査機関を利用しても、万一調査が発覚したらと、ご心痛のことと存じます。」、「このような悩みを、少しでも解消することが出来ればと、此の度世情に逆行して、本書を作成しました。」と。この〝差別を商う者〟が、人倫に反した行為をしている自覚があることは、自らの行為を「世情に逆行して」と明言していることでも明らかである。現在の興信所や探偵社の盛況は、就職・結婚の身許調査＝部落差別の繁茂の状況を示しているのだ。

すでに幕末に加賀（現　金沢）藩士千秋藤篤の優れた身分解放論「治穢多議」＝罪人を扱うのが卑しいならば、刑罰のことを司る役人も卑しいというのか、埋葬に携るのが辱だというなら僧侶はどうだ、鳥獣の殺生を業とするから穢れておるといえば山村の民を同じように考えるか。明らかに

理由のないことだ（奈良本辰也氏による意訳　『叛骨の武士道』中公文庫所収）＝が生れている。しかし幕末の思想すら超えることができずに存るのがニッポン国の現状なのだ。

では日本歴史のなかで被差別身分は、いつごろ、どのような要因で形成されてきたのか。このテーマについては、実は学会でも様々な議論がたたかわされている段階である。極く大雑把に言えば、時期については①中世、②戦国期から豊臣政権（十六世紀末）の時期、③江戸初期（十七世紀初頭）、④江戸中期（十七世紀後半）、⑤江戸後期（十八世期前半）と分れる。そして形成の要因としては、中世賤民の系譜とか、幕藩体制締め直しのための民衆分断支配政策などがある。一向一揆について考えてみたぼく（本書「試論」参照）としては、「戦国大名は、その権力の体質を封建制から家産制（アジア的専制支配）へと変質させることにより、徹底的な反革命的粛正を、（土一揆、徳政一揆、一向一揆にいたる長期間の最も戦闘的な社会層）手工業者・職人に対して行うこととなった」（石尾芳久『被差別部落起源論』）という所説に魅力を感じる（すべてが説明できるものではないとしても）。

それはともあれ、ここで言われる手工業者・職人は中世の漂泊の民である。彼らが貴族たちから賤視されながらも、中世中期までは〝自由の民〟であり、現代に伝わる手工芸や芸能の創始者であったことが、最近、明らかにされている（網野善彦『無縁・公界・楽』平凡社選書など）。

こうしたことから被差別部落に関する考え方も、従来の「暗黒悲惨論」（封建支配の犠牲者）から、「闇の豊饒論（沖浦和光）」（差別や抑圧の中にあっても文化の担い手であった）へと転換しつ

つある。

考えてみると、『文学の中の被差別部落像』も「戦前篇」では、作品の中の差別表現や、作家の意図の及ばぬ時代的制約を、あげつらうことが多かった（それも作品のとぼしい時代を論ずる一つの過程であろう）。しかしこの「戦後篇」では、すぐれた作品を産み出す作家の苦闘の過程に、わが身を投げ入れることができた。そして部落問題について、読者が理解を豊かなものにするのに手助けになる作業を、さらに一歩すすめることができたと考えている。

なぜ文学作品の分析を通じての作業であるのか。少し迂回する。

インドで「アンタッチャブル（不可触民）」と蔑称されている被差別民のありようが、日本の被差別部落民の歴史と酷似していることが、最近、知られてきている。そのインド被差別民が差別の元凶（もと）となっているヒンズー教から、ヒンズー教の垢のつかない原始仏教に改宗して、解放運動を開始している。この中から「ダリト文学（被抑圧者文学）運動」が起っている。なぜ「ダリト文学運動なのか」。

ヒンズー文化が圧倒的な影響力を持つインド社会で、ヒンズー文化と切れることは〝根なし草（アイデンティティの喪失）〟になることである。だから自らの新しい文化を創造する文学運動が必然であるのだ。

「解放文学運動」への期待も、また、そこ（新しい文化の創造）にある。もちろん文学はきれいごとでは成立しない。部落の中に悪もあれば、腐敗の醜もある。それらも含めて、既成文壇文学とは異る解放文学の創造への期待を込めて、この「戦後篇」は成り立っている。

目次

序にかえて—初めて部落問題に接する方へ……3

Ⅰ 散文精神の可能性……平野栄久 13
——石川淳『寒露』論

一……13

二……15

三……22

四 〈事実〉と記録の問題　部落への問題意識……30
「意志の力」について　伝統的（支配的）美意識との対決
〈生活——散文精神〉について

Ⅱ 〈大衆〉文学……平野栄久 43

一 『オール・ロマンス』事件……44

二 北条秀司『王将』……47

三 武田繁太郎『風潮』、『夢園峠』……49

四 松本清張『眼の壁』……52

五　高木彬光『破戒裁判』……56
六　菊田一夫『がしんたれ』……62
七　司馬遼太郎『胡蝶の夢』……65
付論　視野にのぼらぬ被差別者の存在……70
——白井吉見『事故のてんまつ』をめぐって

Ⅲ　大衆の眼と底意をえぐる……山岸嵩　78
——金達寿と井上光晴

一　金達寿
1　金達寿文学の位置……78
2　『眼の色』と『富士の見える村』……83
3　作家精神と邪視……93

二　井上光晴
1　井上文学の位置……99
2　『地の群れ』……102
3　『村』『死者の時』など……111
4　差別の流出と図式の解体……116

Ⅳ　運動としての批評を！……平野栄久　121
——高橋和己『貧者の舞い』、小田実『冷え物』と土方鉄の批判

一　季刊同人誌『人間として』……121

二　高橋和巳『貧者の舞い』……125
三　小田実『冷え物』……134

V　土地所有制と差別……梅沢利彦　146
——竹内泰宏『人間の土地』
一　小説の要素—民俗的なもの……146
二　小説の構造—アジア的生産様式論……152

VI　差別への目ざめとたたかい……梅沢利彦　155
——住井すゑ『橋のない川』
一　『橋のない川』の骨格……155
二　差別への目ざめ（第一、二部）……158
三　融和思想批判から全国水平社へ（第三、四部）……165
四　〃融合論〃の反映（第五、六部）……170

VII　到達した共立の地平……山岸嵩　183
——大西巨人『神聖喜劇』の世界
一……183
二……196
三……204

VIII　解放文学への跳躍台（スプリング・ボード）……梅沢利彦　211
——野間宏『青年の環』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　綜合小説から全体小説への道程
1　ある錯覚……211
2　綜合小説論と第一次中断……213
3　全体小説への模索―一・二部の改作……219
4　第二次中断―「小説の全体」への問い……223
二　たたかいの磁場
1　部落経済更生運動へ―矢花正行……228
㈠　抑圧された欲情と政治的情熱　㈡　皮革統制と融和事業
㈢　友人たち　㈣　部落の情況と生活　㈤　部落の群像とたたかい
2　「汚穢」の剔出―大道出泉……241
㈠　伏線　㈡　「汚穢」への到達
3　腐敗と炎……253
三　『青年の環』、そして解放文学……261
Ⅸ　〈路地〉のもつ意味……平野栄久
――中上健次論
一　……269
二　……273
『岬』……274
『枯木灘』……277
『路地』……280

『鳳仙花』……282
三……285
X　解放文学への期待……山岸嵩……294
一　被差別部落からの文学……294
二　『地下茎』……300
三　闇をわらう作家たち……305
四　闇をつきぬけるものを……312
試論　「部落史前史」としての一向一揆小説……梅沢利彦……319
——真継伸彦『鮫』『無明』『華厳』
一　なぜ「部落史前史」なのか……319
二　描かれた中世〝賤民〟の像
非人……323
牢人衆・谷の衆……325
山家……327
皮細工師……329
労咳病み・傴僂……330
三　浄土真宗と一向一揆……332
四　大教団化と親鸞教の変質……339
あとがき……347

戦前篇　目次

Ⅰ　序にかえて――「『破戒』史の意味」……梅沢利彦

Ⅱ　大衆文芸の位相よりみた差別……平野栄久
――幕末から『破戒』まで――

Ⅲ　『破戒』以降の潮流……平野栄久
――全国水平社創立まで――

Ⅳ　部落問題を欠落したプロレタリア文学……山岸嵩

Ⅴ　水平社運動が生んだ文学……山岸嵩
――西光万吉の戯曲を中心に――

Ⅵ　西光万吉の栄光と悲惨……梅沢利彦
――天皇主義への転落――

I　散文精神の可能性

――石川　淳『寒露』論

平野栄久

生活力とは前途の空虚なる空間を刻刻に充実させて行く精神力のことである。

歴史上の諸事件をつらぬくものは人間精神の運動である。

（石川淳『森　鷗外』）

一

おそらく被差別部落について戦後もっとも早く書かれた文芸作品は、一九四六年（昭和二十一年）、『新潮』五月号に発表された石川淳の『寒露』であろう。

『日本文学全集』（新潮社版）の石川淳年譜には、敗戦の年の「秋、徳島県の特殊部落の視察を

依頼されて出かけた」とある。『寒露』は、この時の体験と見聞にもとづいて書かれたもので、話の大筋は、「先生」と呼ばれる男が部落改善に献身してきた人と県庁の「地区」係の青年に案内されて、阿波の国のある「地区」を「視察」し、その地を去るまでを書いたものである。『黄金伝説』につづくかれの戦後二作目だ。

わたしは、石川文学の系統的な読者ではない。自在神通・軽妙洒脱な裡に苛烈な精神の運動を秘めるかれの文体に惹かれて、折にふれて読んできた人間にすぎない。どんな断簡を読んでも損をした気にならない作家は多くない。また愛読しながらも、批評の対象としてとりあげることに考え及ばない作家がいるものだ。今日まで石川淳がわたしにとってそのようなひとりであった。

こんな訳で、かれの作品はかなり読んでいるつもりだったが、わたしが『寒露』の存在を知ったのも、被差別部落（以降、この意味で部落と略す）にかかわる作品を調べるようになってからであった。なぜこの作品が目にふれなかったのか、その理由を考えてみた。第一に、各社の現代文学全集や文庫本にも採録されておらず、単行本としては今日手に入りにくい事情がある（昭和二十一年、中央公論社刊『黄金伝説』所収）。第二に、わたしの乏しい知見のかぎりでは、部落関係者からも、いわゆる文芸評論家からも、この作品がまともに検討されたことがなかったからである。

部落にかかわる作品について、戦後に書かれた総括的な評論は多くない。そのひとつである北原泰作の『日本近文学に現われた部落問題』（『文学』一九五九年二月号）には『寒露』への言及はない。また、土方鉄の『小説にみる部落差別の表現』（『差別への凝視』、『差別と表現』所収）でも、テーマが差別表現にあるためか、題名があげられているだけである。一過的な「視察」に自己限定

する男の話など問題にならなかったのかも知れない。一方、いわゆる文芸評論家の批評にも、『寒露』をとりあげたものをわたしは不敏にして知らないのである。従来の批評方法からは、この作品を石川文学の中に位置づけることができず、石川淳の部落とのかかわりにとまどいを覚えるからではないか。ことによると石川淳自身、はっきりとは評価できていなのかもしれない。かれの自選になるという最近刊の岩波版『石川淳選集』（全十七巻）にも採録されていないからである。

しかし、『寒露』は、ほんとうに評価、検討に値しない作品であろうか。わたしは、この作品にいくつかの不満や疑問をもちながらも、その根本において、差別――被差別の構造を問い直す戦後日本文学のひとつの可能性をみたいのである。そして、この検討は、同時に、石川文学の核心にあらたな照明をあてることになると思うのである。

二

石川淳は、一九三五年（昭和十年）、三十七歳の時に発表した処女作『佳人』や芥川賞を受けた翌年の『普賢』などによって、戦前すでに特異な作風をもつ作家として文壇では刮目されていたが、一般にはややハイ・ブロウな文学者とみなされていた。しかし、敗戦後、せきとめられていた水がほとばしるように『黄金伝説』、『焼跡のイエス』、『かよひ小町』、『雪のイヴ』など戦後の世相を反映した傑作をたてつづけに発表して、一挙に民衆の魂をとらえたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com